

『東京日日新聞』大正三年の六面コラム

——志賀直哉と佐藤春夫——

菊池 真一

一

大正三年（一九一四）四月十五日、「東京日日新聞」は、「大阪毎日新聞」^{註1}に引き続き、従来の五号活字（九ポイント半）を一新して九ポイント活字を採用、八段組から九段組に変えて記事量を大幅に増やした。今までの紙面が、一段六十六行、一十八字詰、一頁八段であったものを、新活字を用いることよって、一段七十三行、一行十七字詰、一頁九段として、一頁の行数では百二十九行増加、一頁の字数では千六百六十五字増加させることになったのである。講談・寸句や、演芸・美術・文芸関係の記事を載せていた第六面に時折文芸家のコラムが掲載

されるようになったのは、このことと無関係ではなからう。

四月二十二日から五月六日にかけて、「若き血」と題するコラムが断続的に八回掲載された。この中に志賀直哉の文章がある。五月七日から七月二十二日にかけては、「有名無実」と題するコラムが断続的に三十一回掲載された。この中に佐藤春夫の文章がある。

共に全集には掲載されておらず、未紹介のものと思われるので、ここに披露しておきたい。志賀直哉三十一歳、佐藤春夫二十三歳という、若い頃のもので、短いながら直哉はいかにも直哉らしく、春夫はいかにも春夫らしい文章である。（引用に際して、漢字は新字体とした。仮名遣いは原文どおりである。ただし、振り仮名部分で二文字以上の繰り返し符号を用いている

部分は、符号を用いずに該当文字をあてはめた)

二

若き血(コラム名)

夕立の話

志賀直哉

アチラノ山ニ黒雲ガオコリマス。
イナツマガビカ／＼トヒカリマス。
カミナリガゴロ／＼トナリマス。
空ハ見ルマニ暗クナリマス。
カケユク人ノアトヲオツカケケヤ雨ガキマス。
吹キ来ル風ハサツ／＼ト音ガシマス。
夕立ガバラ／＼ト降り出シマス。
庭ハ見ル間ニ池ノヤウニナリマス。
木ノ葉ニアル白露ガハラ／＼トオチマス。
夕蟬ガジン／＼トナキマス。
見ル間ニ虹ハ消エテユキマス。

第四学年生、陳賊(十七歳)と云ふ人の作文です。博覧会の台湾館に出てみました。私は中々い、文章だと思つて写して来ました。見方が広々としてゐてそれで印象的です。駆け行く人の後を追ひかけて影と雨とが来る所などが生々してゐます。夕立が止むで。木の葉の白露がハラ／＼と落ちると、夕蟬がジン／＼と啼き出す所も如何にも夏らしい而して夕立らしい心持がします。「見る間に虹は消えて行きます」で結びがついてゐます。全体十一のフレーズで出来てゐます。それで明かに夕立の降る前から、降り出す所から、降つて、止むで、暫くして虹の消える所まで書いてあるのは中々名文だと思ひました。

(「東京日日新聞」大正三年四月二十七日 第六面)

文中、「博覧会」とあるのは、三月二十日から上野公園で開催されていた東京大正博覧会のことである(七月三十一日まで開催)。日清戦争後、日本は台湾を占領しており、当時は経営二十年を教え、台湾館が参加していた(明治四十三年、日本は韓国を併合しており、朝鮮館も参加している)。

有名無実（コラム名）

軍艦の煙

佐藤春夫

「軍艦の煙」といふ題だが、別に海軍の大官のコンミツション問題を諷刺しやうと思ひついたのでない。矢張り自分自身のことだ。

私は子供の時分画筆を持つことが好きだった。私の家へは旅の画家などが出入したものださうだからそんな関係があるかも知れぬ。兜を横に冠つて三叉の槍を握つた加藤清正を得意にしたのは六つ七つの事だつたらう。尤も虎は、猫に類するところではない、まるで描くことを断念して居たもの、やうに記憶する。稍や長じて毛の飾のある帽子を今度は真直に着た、併し馬に乗らない陸軍大将を巧に描くやうになつた頃、私はまた軍艦の側面図をも試み初めた。今も忘れない、家には、聯隊旗の傍に写生的な波がしらの花弁の菊花をあしらつた表紙のある和

装の日清戦争画報（？）といふ本があつたものだ。私の軍艦もそれを見て研究したものに相違ない。海岸ではあつたけれども片田舎の私どもの故郷では軍艦など、いふものは到底見られなかつたのだから。

さて私は軍艦の側面図を可なり詳細に学び得た時、私は一発見をした。それは自分の今迄画で見た軍艦の煙は皆悉く、船の後ろの方に斜になびいて居るといふことなのだ。然うして私はそれを甚だしく不満に思つた。大に独創を好んだ私は直にその次の機会には、黒い盛んな煙を船の進行する方向へ長々となかせて得たりとしたのであつた。

数年前私はその幼年時代の画稿を発見して自分の愚を嗤笑したが、近ごろのある日ふとまたこの事を思ひ出して苦笑せずには居られなかつた。然し次の瞬間、私の心は珍らしく真面目だつた、私はこんなことを考へ初めたからだ「俺の今、社会の風俗習慣道徳等一般の形式に就て抱いて居る思想も亦、後にして省みれば、幼時の「軍艦の煙」ではあるまいか。」斯う思つた私は、自分のこの消極的な老年染みた考へを極力叱りつけたのである。けれどもどうも時々「軍艦の煙」が氣になつてならぬ。

再び思ふ、世界には進行する軍艦の煙の、常に後に曳くもの

だといふ事にはつい気がつかずに、仕舞ふ人も沢山あるのだらう。して見れば私の幼時の一つの愚な事が、結局私を賢くしたてではないか。間違つて居てもいい、その間違を自ら明らかにするまで私は今の私をつづけやう、と。

斯う書き終へて私は眠るために燈を消す。(五月十日)

(「東京日日新聞」大正三年五月二十三日 第六面)

文中、「海軍の大官のコミッション問題」とあるのは、次のようなことである。大正三年三月二十四日、山本権兵衛内閣は総辞職。後継首班に推された清浦奎吾は、海軍大臣に推薦された加藤友三郎から、戦艦三隻の建造費約九千万円の支出要求という就任の条件を突き付けられたが、これを吞めず、組閣に失敗。結局四月十六日に大隈重信が内閣総理大臣となった(海軍大臣は八代六郎)。

四

「若き血」「有名無実」の全タイトルと筆者を掲げる。

若き血

白雨の死	小野賢	四月二十二日
蘇国湖辺の夕	S M生	四月二十三日
ジョーナリストの悲哀	虎杖	四月二十四日
死の床	荒木郁	四月二十五日
夕立の騒	志賀直哉	四月二十七日
サラの悲しさ	鈴	四月二十八日
赤い木(上)	露月生	五月五日
赤い木(下)	露月生	五月六日
有名無実		
犬の子	龍居枯山	五月七日
うごめき	生田隼介	五月十日
浴泉雑記(上)	小沢愛園	五月十四日
浴泉雑記(下)	小沢愛園	五月十五日
未来主義(上)	小林愛雄	五月十六日
未来主義(下)	小林愛雄	五月十七日
未来主義(下)	小林愛雄	五月十八日

(誤つて再掲したものか)

姉(上)	猪股電火	五月十九日					
姉(下)	猪股電火	五月二十日	風の如く	小野賢	七月四日		(これは四面に掲載)
真の叫び	狭山春作	五月二十一日	法廷から	カブラ	七月九日		
渡場	石井露月	五月二十二日	宮島の思出	小山内薫	七月十四日		
軍艦の煙	佐藤春夫	五月二十三日	オスタンド海水浴場(上)	幽芳生	七月十五日		
原始生活の追慕	村田光烈	五月二十八日	オスタンド海水浴場(下)	幽芳生	七月十六日		
東西文化の混合(上)	中原青蕪	五月二十九日	瑞西の鈴(上)	丸山晚霞	七月十八日		
東西文化の混合(下)	中原青蕪	五月三十日	瑞西の鈴(下)	丸山晚霞	七月二十日		
「自己」の生活	新田佐逸	五月三十一日	涼	露月山人	七月二十二日		
思想とロマンス(一)	加藤朝鳥	六月十七日					
——阿部次郎君へ——			なお、六月一日から八日まで、連続八回、「半舷上陸」という				
思想とロマンス(二)	加藤朝鳥	六月十八日	コラムがあるが、これは紀行文のようである。				
——阿部次郎君へ——							
思想とロマンス(三)	加藤朝鳥	六月二十日	半舷上陸(コラム名)				
——阿部次郎君へ——							
思想とロマンス(四)	加藤朝鳥	六月二十四日	両国から勝浦まで	小野賢	六月一日		
——阿部次郎君へ——							(これは第四面に掲載)
筋の収録	石井露月	六月二十五日	お仙ころがし	静岐	六月二日		
醜化されたる近代劇(上)	倉田啓明	六月二十八日	妙の浦	井沢弘	六月三日		
醜化されたる近代劇(下)	倉田啓明	六月二十九日	健脚を天津へ	近藤京魚	六月四日		

天津と清澄山	猪股電火	六月五日
馬車のなか	(冷)	六月六日
松岸の大漁踊り	近藤京魚	六月七日
刀根湖畔の一夜	井沢弘	六月八日

五

大正三年といえは西暦で一九一四年、言わずと知れた第一次世界大戦勃発の年である。七月下旬には欧州の情勢が不穏となり、戦争関連の記事が増加し、それと呼応するかのようになり、この類のコラムは見られなくなってしまふのである（少なくとも大正三年中には見られない）。

注

1 『大阪毎日新聞』は、明治四十三年以来採用していた九ポイント半（五号）活字を改め、大正三年四月一日より九ポイント活字で九段組としている。『東京日日新聞』も、三月十六日の予告では四月一日よりとしていたが、三月二十三日の予告からは四月十五日よりとしている。

2 『志賀直哉全集』第十四卷（岩波書店、昭和四十九年八月刊）の年譜・著作年表に記載なし。生井知子氏の「志賀直哉全集未収

録資料紹介」（『甲南国文』第40号、平成五年三月）にも記載なし。
『佐藤春夫全集』第十二卷（講談社、昭和四十五年三月刊）の単行本未収録作品・佐藤春夫年表に記載なし。同書校注（六一五頁）には、

本文に組入れるには問題があり、省いてしまうには惜しい二、三のものを、参考資料として此処に掲げておく。紙数の関係で殆ど収録出来ない単行本未収録作品には、せめて最初期の春夫の筆になるものは断簡零墨の類までも集めておきたい筆者の希望からである。

とあり、明治四十五年一月から大正三年十月にかけての敷点を掲げているが、ここにも見られない。